

キネマの天地

映画文学人生論

原作：井上ひさし(1986年) 参考：「蒲田行進曲」
監督：山田洋次 (1986年) 監督：深作欣二
脚本：井上ひさし 山田太一 山田洋次 浅間義隆
出演：田中小春 有森也実 山田洋次 高羽哲夫
喜八 渥美清 音楽：山本直純
ゆき 倍賞千恵子 小倉監督 すまけい

そうか、娘の晴れ姿を見ながら死んだか
旅役者のおとつつあんなは

山田洋次監督の映画『キネマの天地』を観て寅さんの最期を見とどげた。寅さんは『男はつらいよ』第四十八作「寅次郎紅の花」で、阪神淡路大震災のボランティアをした後、消息をたっていたが、ひそかに旅役者あがりの喜八と名前を変え、浅草の裏長屋にひそんでいたらしい。

しかも、隣家に住むのは博（前田吟）、さくら（倍賞千恵子）に満雄（吉岡秀隆）の一家。名前は変えてあるが、『男はつらいよ』の妹夫婦にその一人息子と同じ顔ぶれである。

違うのは寅さん（喜八）に器量よしの娘の小春（有森也実）がいることだ。旅まわりの一座の女が生んだ子で、喜八の実の子ではないが、喜八が自分の子のように可愛がって育てた。

その小春が浅草の帝国館で、「ええ、おセんにキャラメル、あんパンにラムネはいかがですか」と売り子をしているところを蒲田撮影所の小倉監督（すまけい）にスカウトされ、トントン拍子に出世して、大スターになる。

うだつのあがらない旅まわり一座の大根役者で一生を終わった男にとっては夢のような話だ。喜八は映画『浮草』を観るために帝国館へ行き、主演田中小春というタイトルを見て、涙をふく。

映画が終わると、手にしていたキャラメルの箱から、ぼろぼろと中味がこぼれ落ちた。喜八の命



キネマの天地

映画文学人生論

がプツンときれた瞬間である。

「そうか、娘の晴れ姿を見ながら死んだか、旅役者のおとつつあんは」と映画監督は言った。いかにも寅さんの最期にふさわしいピンピンコロリの理想的な死に方である。

もちろん、これはつくり話だ。現実はそのなに甘くはない。しかし、観客はつくり話であることを百も承知で映画を観る。最初から幻惑されることが目的なのだ。うだつの上がない生涯を送った寅さん（喜八）が理想的な死に方をしたのを知り、よかったねと共感する。

その頃、撮影所ではオーケストラが奏でる「蒲田行進曲」にあわせて娘の小春が歌っていた。

春の蒲田 花咲く蒲田 キネマの都

スター誕生——これも庶民の夢である。裏長屋で育った貧しい家の娘がスターに抜擢されるのを観て、よかったねと観客は感情移入する。

時代は昭和八年。私が生まれる前だが、蒲田映画は最盛期を迎えていた。小津安二郎監督が『浮草物語』でキネマ旬報ランキングの三年連続第一位に輝いた年でもある。もともと、『キネマの天地』では、小春を主役に抜擢し、『浮草』を撮ったのは凡庸な小倉監督ということになっている。

浮草の起承転結よかったね